

大阪・関西万博開催に向けた御意見

御所属 大阪府立大学 准教授御名前 武田 重昭 様

1. 2025年の大阪・関西万博に何を期待するか

- ① 万博というイベントそのものの価値を変えるプロセスを構築する
 - ・レガシーという事後遺産の形成だけでなく、準備のプロセスそのものを目的化する
 - ・リーダーシップ型からフォロワーシップ型のイニシアティブへの転換
- ② 大阪・関西の将来への期待を高める
 - ・会場内のパビリオンを巡るときだけではなく大阪・関西での一連の体験を万博と捉える
 - ・国内はもとより世界から訪れるすべての人に大阪・関西がこれからも持続可能でさらに魅力的になっていくことを実感してもらうことで都市に対する信頼や期待を高める

2. 大阪・関西万博で見せるべきコンテンツは何か

- ① 科学技術を展示する博覧会から生活文化を共感する博覧会へ
 - ・科学技術による驚きだけでなく、それらを通じた豊かな暮らしを世界中の人々が実感し、各国の文化に照らし合わせた行動につなげるための体験を提供する
- ② 会場そのものを都市の持続可能性を高めるための新しい土地の風景（ランドスケープ）に
 - ・保護や再生だけでなく新たにつくり出す自然を見せる
 - ・消費の場としての都市を支える生産の場としての大地（地形+植生）をつくり出す
 - ・大阪・関西の都市活動を支える環境循環型の資源・エネルギーの生産拠点
 - ・時間を価値に変える将来へ可能性をつなぐ技術

3. 会場計画及びインフラ整備についての新たなアイデアや意見

① 建設プロセスのイノベーション

- ・50年のプロセス

〔1970万博〕①自然丘陵地 → ②造成 → ③会場建設 → ④自然再生

〔2025万博〕①埋立地 → ②自然創出 → ③会場建設 → ④自然育成

- ・5年のプロセス

〔これまで〕

2次造成・インフラ整備（土木）→ 上物建設（建築）→ 緑化・修景（ランドスケープ）

〔これから〕

地形と植生の自然基盤（＝大地）の創造 → インフラ整備 → 上物建設

※緑化や修景といった見せかけの自然ではなく、本物の自然をつくるプロセスに万博がエンジンとして寄与する仕組みづくり

② 自然創生プランニングの挑戦

- ・世界からの参加を募り時間に挑戦する

〔造園界の経験〕明治神宮の森は国民の献木で100年かけてつくった自然

〔舞洲での挑戦〕埋立地に世界の人々と5年で創生する自然

- ・自然創生の技術確立

これまでの自然保護・再生技術に加えて、建設時から会期後の継続的なモニタリングで、自然を育てるための技術を確立（愛知ターゲットの達成にも寄与）

- ・ランドスケープ・インフラの創出

自然とインフラが一体となった環境基盤を整備（グリーン・インフラの進化形）

進歩する自然環境

経年劣化に対する時間を価値に変える技術＝時間が経つほどよくなる都市インフラ

大阪・関西の風景を会場に生けどる借景の手法

③ 準備段階からすべてのプロセスへの参加

- ・「万博に参加する」から「万博を開催する」という自負心を育てる

構想-計画-設計-施工-管理-運営の全てのプロセスでの Co-Creation を実現

特に万博前と後のステップを重視

会期前から世界の人々のつながれる機会の拡大

市民参加手法の転換（モノの要求からコトの共創へ）

施工段階での積極的な参加で会場（土地）への愛着を育む

I LOVE 型ではなく I AM 型のコミュニケーションデザイン

廃棄物などを用いて誰でも気軽に参加できる機会が社会的意義を持つように工夫

- ・大地の造形への参加

70年万博の森をはじめとするこれまでのレガシーから樹木を集める

関西エリアの自然再生（尼崎 21世紀の森など）のノウハウを結集

④ 人のいる風景で魅せる会場デザイン

- ・技術を展示するのではなく生活の豊かさを体感する会場へ

ベースとしての環境の上に人々の活動がのすることで魅力が増す風景を演出

人の営みがあることで環境の価値が増すデザイン

⑤ 夢洲以外も含めた大阪・関西会場の整備

- ・Band Park（バンパーク）の整備

既存の公園緑地を活用した効率的・効果的な環境のネットワークを実現

パークコネクターやグリーンウェイと呼ばれる歩行者・自転車専用道で連結

会場内にいる時だけが万博ではなく、移動も含めた一連の体験を演出

- ・舞洲から大阪・関西への波及効果

環境共生・資源循環・エネルギー再生による新しい「都市の肺」としての機能

消費の場としての都市と対になる生産の場としての機能

4. そのほか、御自由に御意見を申し上げます。